も嘴も、この通り黒くなつてしまつたのだ。所でそれでも日に焦けず、白い奴がほんとにあるとすれば、それこそお日様のお側に出ない、横着鳥に相違無いから、人間の手にかけるまでもない、おれ達の仲間で引つかまへて、曝らし物にしてやらうでないか。』

と云ひますと、

『全くで御座います。黒いに極まつた私共の間に、そんな生白い奴が居りましては、鳥仲間の面汚しで御座います。早速捕へてやりましやう。』

と、これから大勢が手配をしまして、山中を捜しまは

る事になりますと、何しろ何千羽とも知れない鳥が、一度に立つて飛びまはるのですから、その羽音斗りでもやかましいのに、またガア〳〵ガア〳〵と、大きな口をあけて鳴き立てるのですから、その騒がしい事は、汽車と電車が競走して、それを雷が囃やして居る様です。

すると、この鳥の聲が、天のお日様の御殿へも聞えました。

『一體何だ、あの騒ぎは？』

と、お日様はお聞きになりますと、お側に控へて居た

一羽の鳥が、『實はかやうな理由で、横着者の白鳥を、皆で狩り出して居るので御座います。』

と、委しく申上げました、お日様はカラ〳〵とお笑ひになつて、

『何の事だ白痴者めが！そんな所を捜したつて、なんで其奴が居るものか。』

と仰有います。

『それでは何所に居りますので御座いましやう。御存じなら御教へ下ださいまし。早速あの者共に知らせてやりまして、直ぐと引捕へさせますで御座いましやう。』

と、云ひますと、

『それは何所でもない。あの國の王の所に居る。』

『王様の所と仰有いますと、あの御殿で御座いますか。』
『いかにも。』
『御殿の何邊に居りましやう？』
『奥殿に居る。』
『奥殿と申しますと、王様の御座所で御座いますか？』
『その通りぢや。』
『それは難有う御座いました。早速知らせてやりましやう。』
と、その鳥は直ぐ飛び出して、山の鳥の騒いで居る所へ來て、急いでこの事を知らせました。

それを聞くと鳥共は、一度に羽根をそろへて、王様の御殿へ向つて行つて、その奥殿の王様の御座所へと、ガア〳〵云つて飛び込みました。

これには流石の王様も、肝を潰さずには居られません。さてはあの山の鳥共が、山を狩り立てたのに腹を立てゝ、此方へ押かけて來たのだなと。こりや飛んだ事をしたと急いで家來共に號令して、白い鳥を探す事は、もう止める事になさいましたけれども、鳥共はまだ退きません。仕方無しに王様は、側にあつた献上の羊を投げてやりましたら、鳥共は大喜びで皆でよつて

たかつて、その羊の肉を食べてしまふと、まるで凱歌の様に、ガア〳〵ガア〳〵鳴き立てながら、やがて山の方へ引揚げました。

あとに王様は、ホツと一息つきながら、

『何の事だ馬鹿々々しい。銀の羊まで取られてしまつた。』

と、仰有いますと、その時彼方の御殿の庇で、

『アホウ、、、！』

と云ふ者が居ります。

『憎い奴め！』

と睨めつけましたら、それは一羽で殘つて居た、山の親鳥でありましたが、その頭の上からは、お日樣の光を眞面に浴びて、それは金色に光つて居ました。

## 雪の白犬。

アラなんて可愛い犬でせう!?』

と、玉子は立止まつて、かういひました。それは、溝のはたの石のそばに、生まれてまだ十日ほどしか經たないくらゐ、小さな〳〵白犬が一匹、キウ〳〵鳴いて居るところを、ふと見つけたからでした。

『ナニ、可愛い犬！』

と、松雄も、そこへ寄つて行きますと、犬はキウ〳〵いひながら、ヨタ〳〵二人の前へ出て來ました。

『ウン、好い犬だねエ。何してこんな處に居るんだらう？』

といひますと、犬は哀れな聲をして、

『私はこゝへ棄られたんです。それでなにも食べませんから、お腹がすいてたまりません。どうぞ拾つてつて飼つて下さいな！』と賴みました。

『まア棄てられたつて？　可哀さうに！　ひどいことする人があるのねエ。ちやア私、拾つてあげるわ。』

と、玉子は、子犬を抱きあげて、自分の掌にのせます

と、松雄は、すぐそれを引取つて、行きました。

『なんだつて棄てられたんだ？　お前が何か惡いことしたんぢやない？』

『いゝえ、なにも惡いことしたんぢやありませんけども、私があんまり小さいもんですから、なんの役にも立たないつていふんで、それで棄てられてしまひました』

『小さいたつて、仕方がないぢやないか。お前はまだ子供なんだらう。子供が小さいのは當然だよ。僕達だつて子供だから、この通りまだ小さいけども、今に大きくなると、立派に大人になれるんだ』

と、松雄は慰めるやうにいひましたが、犬は頭を振つて、

『子供なら仕方がないんですけども、これで私はちんころなんです。それでも小さい質なんですから、いつまで經つても大きくなれないんです。ですからみんな馬鹿にして、猫までが私をいぢめに來るんです。……』

と、果は涙ぐみますから、玉子はなほ可哀さうになつて、

『なアにいゝとも〳〵！　小さくても憐憫ならいゝワ。心配しないで氣を大きくもつといで、私達が連れてつて、お家で大切に飼つてあげるから、ねエ、兄さま。』

『さうとも。僕ア小さな子犬が大好きだ。』

と、これから二人は、この子犬を家へ連れて歸つて、小さいからチビと名をつけて、可愛がつて飼つてやりますと、犬は大そう嬉しがつて、よくこの二人に懷きました。

ところがこの家の近所には、野良猫が澤山居りまして、よくこの家の臺所へも、お魚をぬすみに來て居りました。で、チビの居るのを見つけますと、初めは一寸驚きましたが、なにしろ自分達より小さい軀をして居ますので、

『なアんだ。あれでも犬のつれか。』

『犬は犬でも、かんじん撚の犬だ。』

『あんな奴なら、恐かア無いぞ。』

と、相變らずやつて來ました。チビはまたこれを見ますと、

『おのれ憎い野良猫共め！』

と、悔しがつて吠えましたが、吠えれば吠えるほど、

『ヤア、何所かで蚊が鳴いてらア。』

『虻が呻つてるやうだぞ。』

なぞと馬鹿にして笑つたり、駈け出せば、駈け出すほど、

「ソレ、蚤がはねてるぜ。」

「いゝえ、虱が這ひ出したんだよ。」

と、悪口をいつて、からかひます。

チビはもう残念でたまりません。「あゝ私がこんな軀でなく、もつと大きな犬だつたら、あんな奴の二匹や三匹、只の一口に咬殺してやるのに……あゝ、どうして大きくなりたい、大きくなりたい。」と、そればかりをいのつてゐました。

するとある日のこと、急に寒さがつのつて來て、雪がチラチラ降り出して來ました。雪が降ると寒がりの猫は、皆かじかんでしまひますが、それに引かへて犬は、自分の叔母さんだと云ふ位、雪は大好の物ですから、喜び勇んで表へ出て、ドン〳〵と降る雪の中を、彼方此方駈けまはつて居ましたが、その中に

雪が積ると、その積つた雪の上を、蒲團でも敷いてもらつたやうに、コロ〳〵ころがつて遊んで居ました。

ところがその雪が、チビの轉がるたびに體についてそれが少しも取れない斗りか、却つて段々嵩が增しましたが、元が眞白の犬ですから、雪で包まれるとそのまゝふくれて、果は立派な大犬になりました。

また此方の野良猫は、雪がいやさに引込んでゐると、あまり寒いので身がちゞまつて、みんな小さな體になりました。

それでもお腹はすきましたから、たまらなくなつて

餌を探しに出ますと、それを見つけたチビは、いきなり飛びかゝつて吠えつきました。

ところが前の小犬ではなく、今は大犬になつて居ますから聲までワンワンと太く聞えるので、野良猫どもは肝をつぶし、首をちゞめて逃げ出しましたが、只さへ寒さでかじかんで居るところへ、またひどく驚かされたので、四本の脚が震へてしまつて、思ふやうに逃げられません。

たちまちの中につかまつて、野良猫どもはこのチビに、みんな食はれてしまひましたが、その時あまり働

いたので、今まで體に積つて居た雪を、皆振り落してしまひましたら、又元の小犬になりました。

けれども手柄をしたのも、みんな叔母さんのおかげだと云ふので、チビは前よりも、一層雪が好きになりました。

お伽選集 犬と猿 終


大正十年十一月十五日印刷
大正十年十一月二十日發行

お伽犬と猿

定價金壹圓五拾錢
送料金拾錢

著作者 巖谷小波
發行者 東京市神田區今川小路二ノ十七 稻垣利吉
印刷者 東京市神田區淡路町二丁目二番地 瀨下三郎
印刷所 東京市神田區淡路町二丁目二番地 文進堂

發行所 東京市神田區今川小路二丁目十七番地 九段書房 振替東京二六六六七番


不許複製

301
213

終